親ウナギ初めて放流

遠州灘沖 料理店ら不漁打開へ

養殖ウナギの稚魚となるシラスウナギの不漁が続いている状況を打開しようと、浜松市のウナギ料理店と卸売業、漁業者の三者が二十五日、産卵を控えた「親ウナギ」を遠州灘沖で初めて放流した。

シラスウナギ漁は十二月から始まるが、過去三年の間、漁獲量が極端に減った影響で仕入れ価格が高騰。今年はたまらず値上げに踏み切る料理店が相次いだ。

「うなぎ文化」の存続に危機感を持った浜松うなぎ料理専門店振興会と浜松うなぎ販売組合が、浜名湖で捕れた三～五年生の天然ウナギ百キロ二百五十匹を買い取り、浜名漁協所属の漁船で太平洋に放流した。うまくいけばマリアナ諸島沖で産卵し、生まれたシラスウナギが戻ってくると期待する。

卸売業の一人は「すぐには効果は出ないだろうが、何もしなければ浜松からうなぎ料理が消えるかもしれない」と漏らす。浜松うなぎ料理専門店振興会の高橋徳一会長は「値上げで消費者には非常に迷惑をかけている。放流したウナギの子どもが少しでも日本と浜名湖に戻ってきてほしい」と話していた。

（南拡大朗）

料理店などが協力して太平洋に放流したウナギ＝浜松市西区の舞阪漁港で